連載

新屋のアスリートたち (12)

4年連続甲子園出場で最終学年ではベスト4　梅崎作太郎

「戦前秋田の3大投手」の一人・梅崎作太郎は、大正5年3月20日、関町に誕生した。

同11年4月、日新小学校尋常科に入学。当時の新屋に野球熱が高まっていたせいか、野球部に入った。

同15年、第6回全県少年野球で日新は高等科も尋常科も初優勝を遂げ、梅崎は5年生ながら5番を打ち、大器の片鱗を見せていた。翌昭和2年も4番遊撃手として尋常科の全県2連覇に貢献した。少年時代の梅崎は「色白で頬にほんのり紅を差したような顔」と伝わっている。

同3年、高等科に進んだ梅崎は、6番右翼手で活躍したが、優勝した神宮寺に準決勝で4―3で惜敗。

同4年、梅崎―横山のバッテリーを擁した高等科は初戦から決勝まで全試合を完封勝利。2度目の全県制覇を遂げ、4連覇の尋常科とともに2度目のアベック優勝を遂げた。

新聞は「うなる梅崎の怪腕　県内ファンをわかす」の見出しに始まり「球場周囲の人家の屋根といわず、便所の屋根といわず、人で埋まり、はては樹木の枝によじ登り、物凄い状況だった。」と描写している。

後年になって「日新の黄金時代でも傑出していたのは昭和4年。特に梅崎・横山金作のバッテリーは『無人の野を行く』の観があったものだ」と回顧されている。

同5年4月、梅崎は秋田中学（現・秋田高校）に進学し、すぐ一塁手として出場。貴重な左腕投手としての出番もあった。

秋中時代

2年生では3番に定着し、救援投手としても活躍した。全国大会の予選は八戸中を退けて7年ぶりに甲子園出場を決めた。甲子園では千葉中を6―0で完封。大正4年以来の勝利を得たが2回戦で敗れた。

梅崎は理数系が苦手だったらしく、合宿中では先輩たちが学習指導してくれたという逸話も残っている。

3年生になり、エースの重責を負うことになった。外角球に加え、鋭くシュートする低めの内角球は凄みを増し、頓（とみ）にコントロールが良くなっていた。

県予選で秋田商を、奥羽予選では秋田師範を下して2年連続甲子園に駒を進めた。

秋中野球部
自筆サイン入り

甲子園では雨の中、早実に敗れたが、総評では「梅崎の投球には速・曲球ともに将来を期待されるものがあり、早実の打者を5回まで相当苦闘せしめたことは推称すべき好投手である。ただ彼がピンチに際しての決め球がなく…バックの守備も…」と課題を指摘された。

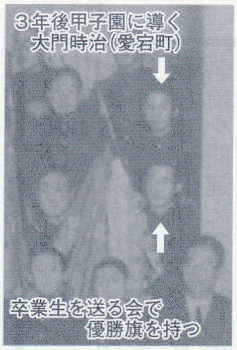
4年生の県予選では決勝で秋田商に敗れたが、奥羽予選決勝では秋田商を8回の満塁本塁打で逆転。10―9の辛勝。下馬評を覆して3年連続甲子園の土を踏んだ。

初戦で紀和の郡山中に凡失により逆転されたが、新聞の総評では「投手力では梅崎の方が鋭く、5回と8回にバックの凡失が無かったら、易々と郡山を下しただろう。梅崎の投球には進歩の跡が認められ、制球力は良く、洗練された投法は実に堂々たるものだった。秋中を残しておきたかった」と評価された。

昭和9年。最終学年を迎え、梅崎は主将となり、県予選も奥羽予選も秋田商を下し、4年連続甲子園出場を果たした。

第20回全国中等学校優勝野球大会の初戦で福島師範を5―1で一蹴。次の北陸・敦賀商も17―7で退け、19年ぶりに準決勝進出。相手の広島・呉港中学は大会随一の投手・藤村富美男（後に「ミスター・タイガース」と呼ばれた阪神の強打者）を擁し大本命であった。

試合前、藤村の体格や髭面（ひげづら）を見てナインは「あればオドだ」とビビった。それが原因かは不明だが、完封された。しかし、4年連続甲子園出場は県内では未だに破られていない。


3年後甲子園に導く
大門時治（愛宕町）
卒業生を送る会で
優勝旗を持つ

昭和10年春、秋田中学卒業後、東京鉄道局に入社した。徴兵検査を避けて専修大学2部に通学し徴兵延期ギリギリの25歳まで学業を続けた。

同17年初春、現役兵として歩兵第223連隊に配属された。同じ部隊にいた秋中野球部の仲間が「幹部候補生」に志願するよう勧めたが「兵隊が嫌いだから早く現役を終えたい」と頑として聞き入れなかった。

同18年12月、部隊は西部ニューギニアのサルミに上陸。彼は暗号手勤務であった。米軍は19年4月21日より大空襲を行い上陸。激戦が続いた。

梅崎はマラリアに罹り、食糧不足もあって次第に衰弱し、9月11日遂に帰らぬ人となってしまった。28歳。

戦争は前途ある若者の命を奪った。元気であれば、日新野球のために尽くしたはず。早く兵役を終えたいと願って将校になることを拒み続けていた彼は、どんな人生設計を描いていたのだろうか？独身だったので子孫も残せず無念であっただろう。憎むべきは戦争である。（のばこやま）